

地自然洞窟に入る

五月三十一日

第二十四師團第一線殘置部隊に獨立混成第四十四旅團第一線を撤退す第六十二師團の新戦線大なる變化なし

六月一日

右翼第六十二師團正面大なる變化なし  
首里高地を占領せる敵は此の日國場川の線に現出す歩兵第六十四旅團  
歩兵第三十二師團及海軍根據地隊は本部、津嘉山及長堂の線に於て  
敵の前進を阻止す

六月二日

歩兵第六十四旅團及歩兵第三十二師團は現在の線を撤退す

六月三日

大里城址より稻福附近を経て知念半島頭部に對する敵の追撃最も急  
にして先に第六十二師團長の指揮下に入る樋口大佐指揮の重砲兵

第七師團及船艇工兵第二十三師團の殘存部隊は逐次糸敷方向に後退  
しつつあり爾余の正面に於ける敵の追撃は活潑ならず第六十二師團  
主力は稻嶺東西の線に歩兵第二十二師團は友寄附近澁波川の線に在  
り

海軍根據地隊は一部を以て依然長堂、根差部附近を保持しあり  
喜屋武陣地に後退し來たれり船艇團長大木中佐以下約一千五百は  
既に新陣地に配備を終れり獨立混成第四十四旅團長の指揮下に入り  
しむ

六月四日

第六十二師團及第二十四師團各主力、獨立混成第四十四旅團、重砲  
兵隊夫々喜屋武新陣地に後退す  
各兵團配備の状況要圖第六の如し  
重砲兵第七師團及船艇工兵第二十三師團は獨立混成第四十四旅團長  
の指揮下に復帰し知念半島地區に策動して敵の背後を擾亂すべき任

務を興ふ

新陣地に集結し得たる推定總兵力左の如し

第二十四師團同此屬部隊	一、二〇〇〇
第六十二師團	七〇〇〇
獨立混成第四十四旅團	二〇〇〇
軍砲兵隊	三〇〇〇
重直轄諸部隊其他	五〇〇〇
合計	三〇〇〇〇

以上の數字は各兵團の概ね掌握せる兵力にして實數は更に大なるべし又首里戰線退却の頃の推定總數は約五万なりしが前述の數との差大なるは退却中戦中の消耗を計るものなり

殘存の人員は石の如く大なるも其の殆ど大部は未訓練の後方人員及防衛召集者等にして精銳なる戦闘兵員は各部隊とも敵上陸當時の二割内外と判断せられたり然れども大隊長以上の幹部の戦死は左の如

く比較的僅少にして指揮能率は尙概して健全なり

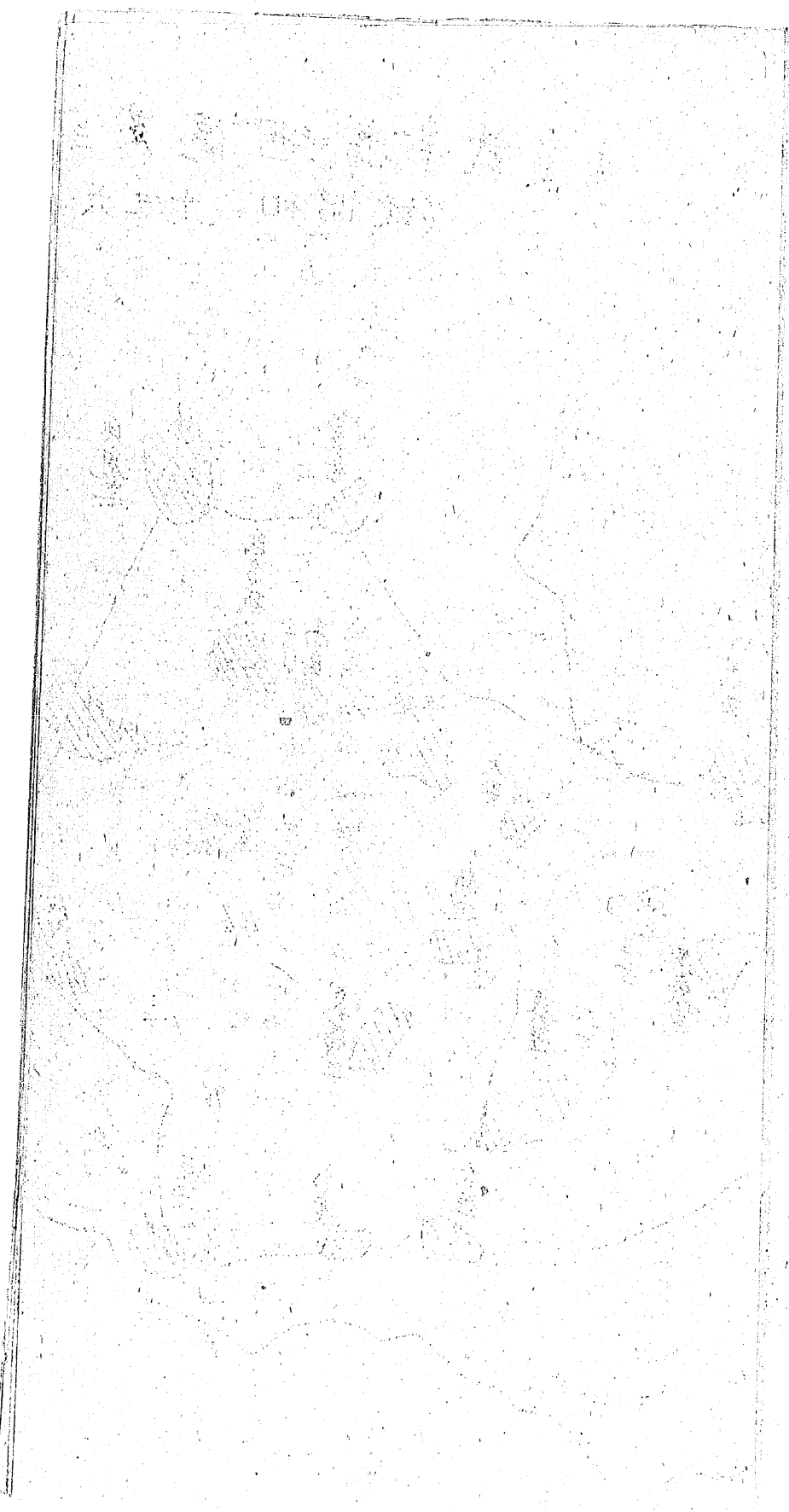
第六十二師團	參 課	一
步兵大隊長		一
步兵大隊長		三
步兵大隊長		一
戰車隊長		一
特設脚隊長		二
獨立步兵大隊長		一
獨立機關銃大隊長		一
獨立速射砲大隊長		一
獨立大隊長		三

其の他省略

人員に比し兵器の損耗は特に甚大にして歩兵自動火器は五分の一步兵重火器は十分の一(殆皆無)程度に減少し手榴彈、急造爆雷も亦

殆ど皆無なり只予想外に損害少かりしは火砲にして野砲級二分の一  
 を存し特に重砲兵は尙<sup>15K</sup>二、<sup>15H</sup>一六、<sup>AA</sup>約一〇を保有しあり  
 此の日小祿海軍地區に於ては敵は〇五〇〇鏡水より大嶺を経て具志  
 に亘る海岸に上陸し一舉に那覇糸満街道の線に進出し海軍部隊の主  
 力は金城、豊見城、宇榮茂間の地區に在り

要圖第六





第七款 喜屋武半島地區の戰鬪 (至六月二十五日)

六月五日

知念半島方面よりする敵第七師團の追撃は頗る急にして既に約二〇〇の敵は具志頭附近に現出せり  
首里地區より喜屋武地區に避難せる非戰鬥員に對しては五月下旬知念方面に移動する如く命ぜられありしが該方面敵の近迫に伴ひ再び喜屋武地區に復歸するもの多し

六月六日

具志頭附近守備の獨立混成第十五聯隊第一大隊先ず近迫する敵と激鬪を開始す  
安里附近に陣地を占領せる獨立臼砲第一聯隊は軍砲兵隊長の指揮を脱し獨立混成第四十四旅團長の指揮下に入る  
海軍根據地隊は金城、小祿、豊見城間の地區に包圍壓縮せられんとしあり

六月七日

具志頭附近の戦闘愈々激化する  
當初混成旅團長は具志頭五三高地附近の陣地は前進陣地たりしむる  
予定なりしも同陣地の價値に鑑み主陣地帯の一部と見做し之を頑守  
するに決せり

六月八日

敵の大部隊は東風平附近に南下したる後逐次志太伯附近を経て四方  
我が左翼方面に近接中なり  
志太伯附近に在りし歩兵第二十二聯隊第一大隊は主陣地内に後退せ  
り

六月九日

當初軍は地形上敵の重壓は第二十四師團左翼方面に指向せらるゝ算  
大なりと判断しありしも海軍部隊が小祿地區を死守するに至りし爲  
第二十四師團正面未だ敵と觸接せざるに混成旅團正面の戦闘既に激

化しつゝある状況並に海正面に對する敵の策動活潑ならざるに鑑み  
予備兵團たる第六十二師團に益し其の二ヶ大隊を隨時混成旅團正面  
に増加し得る如く待機せんむると共に同方面への全力機動を準備せ  
しめたり我が左右兩翼に對する敵の攻撃時機が先後せしは前述我が  
海軍の小祿地區死守の外敵の第二十五軍團と海兵第三軍團の戦法の  
相違に基因するものならん即ち我が右翼に迫れる第二十四軍團が滲  
透戦術を取るに反し我が左翼を攻撃する敵海兵軍團が十分攻撃準備  
を整へたる後一舉に全縱深を突破する戦法を採用せるに因るものと  
觀察せられたり

六月十日

混成旅團全正面敵の猛攻を受く

第二十四師團正面の敵は漸次我が陣地に觸接しつゝあり

六月十一日

混成旅團正面敵の攻撃重點は安里附近にして敵の戦車用法は首里戰

線當時に比し大規模且大膽なり敵は主力を依て安里正面を猛攻する  
 と共に丁敷嶮より成る戦車群を以て安里北側一二二高地東側より八  
 重嶮岳守備隊の背後に進出す敵の此の進攻路は寧ろ我が豫て地形判断上  
 既に旅團の左地區隊たる特設第六聯隊が配備の重點を八重嶮岳山頂  
 に保持せず東麓崖下に置きて陣地を占領しありしと鑑み彼の牧港  
 伊祖附近に露呈せし其れと同様の弱點を認め混成旅團に注意を喚起  
 し置けるるところなるに再び敵に乘せられたるは遺憾なり斯くて軍主  
 陣地帯内の二大隊結の一たる八重嶮岳の基盤龜裂を正し其志願守備  
 隊又全滅し混成旅團の兩翼危急に瀕し其の全陣地頓に弱化する  
 在小隊海軍根據地隊司令官より左記要旨の最後の電報を受領す

左記

敵戦車群は我が司令部洞窟を攻撃中なり根據地隊は今十一日二三  
 三〇玉碎す従前の厚誼を謝し責望の健闘を祈る

六月十一日

第二十四師團正面の敵全線攻撃を開始す

歩兵第三十二聯隊の陣地吉台附近戰鬪最も激烈にして第一線隊  
 は砲兵協同のもと善戦し敵に甚大なる損害を與へつゝあり  
 數日來混成旅團正面のみ激闘を續け第二十四師團方面の戦況頗る緩  
 なる爲軍は同師團が戦はずして混成旅團の陣地を突破せる敵の爲背  
 面より攻撃せられて潰滅することを憂慮し右翼正面の過早なる崩壊  
 阻止に努力しありしが軍首腦部は茲に於て初めて重荷を下せるの感  
 あり

混成旅團の中央（奥座仲座附近）及右翼（海峽に面せる斷崖上）の  
 戰鬪激烈を極め敵は時に依り五、六丁輪以上の戦車群を以て我が陣  
 地を蹂躪す更に旅團は其の左翼との連絡を失し八重嶮岳方面の状況  
 を把握しあふさむのみならず同方面を強化する餘力なほものゝ如し  
 八重嶮岳失はば因る危険を痛感する第二十四師團及軍砲兵隊より之  
 が保持強化の要求頻りなり

軍は一兩日來軍砲兵隊、軍通信隊等より抽出せる少くも六ヶ中隊の  
 編歩兵部隊に今日運軍司令部に控置しありし第一野戰築城隊の  
 主力を混成旅團に増加しつゝ、あるも裝備劣弱訓練未熟なる部隊なる  
 爲に戦闘加入と共に直に甚大なる損害を受け所謂燒石に水の感あり  
 第六十二師團の獨立歩兵第三大隊同第十五大隊を混成旅團長の指  
 揮下に入らしむ

六月十三日

全線激闘を續く  
 第二十四師團は歩兵第三十二師團正面を緊縮強化する目的を以て第  
 二線に控置せし歩兵第二十二師團主力を最左翼眞榮里正面に推進す  
 ると共に最右翼八重瀬岳方面よりする側背の脅威を除去する目的  
 以て搜索第二十四師團主力をして該方面に攻勢を取らしむ混成旅團  
 は八重瀬岳方面の左地區隊との連絡を回復し待さるのみならず今や  
 其の中央及び左翼の保持に忙殺され左翼を救ふの餘力なし旅團長は軍

企圖に基き漸に増加せられたる獨立歩兵第十五大隊を八重瀬岳に又  
 獨立歩兵第三十三大隊も最右翼に夫々前進せしめ兩翼の崩壊を阻止す  
 る如く處置せり

軍砲兵隊は各種砲約二十門を有するも彈藥殆ど盡き加ふるに部隊の  
 素質極度に低下し且上下、左右、視砲間の通信連絡其の機能を失ひ  
 歩砲の協同戦を失ふこと多く其の實力首里戰線當時に比すべくもなし  
 軍は今や殆ど無裝備となれる全軍將兵が徒手空拳敵の艦砲、機銃、  
 迫撃砲、機銃等の集射する中を切齒扼腕しつゝ、戰車群に突入しつ  
 つあるを觀大本營、方面軍、奄美守備隊、先島集團等より極詳彈藥  
 を入手せんと焦慮狂奔せり然れども遠く海洋を隔て孤立無援の空國  
 下に在りては策の施すべき余地なし僅かに第六航空軍の努力により  
 空中輸送に依り手榴彈、擲彈筒等と二、三機を受領せらるに過ぎず又  
 奄美守備隊の積極的企圖に逐く彈藥積載の剝舟五隻は遙か徳之島  
 より中城灣外洋嘉島沖に無事南航し來れるも遂に軍主力陣地を指呼



のうちに眺めつゝ敵掃海艇の襲撃を受け悉く海底の藻屑と化し去れ

六月十四日

混成旅團右翼に増加を命ぜられたる獨立歩兵第十三大隊は隊長原大佐の適切なる指揮の下に万難を排し山城附近より敏速に與座、仲座南側に進出戦闘に參加せり然れども珊瑚岸上據るべき陣地も地物もなく一日にして其の戦力の大部を喪失せり獨立歩兵第十五大隊は全軍の期待に拘はらず其の進出緩慢（大隊長飯塚少佐は重病にて擔架上より指揮しありしと謂ふ）にして與座岳南方の線を越へて前進する模様なし第二十四師團長より同大隊の攻撃前進を要求する督促頻りなるも今や八重嶺岳確保の希望は放棄の止むなき状況なり第二十四師團主力正面は概ね其の陣地を確保しあり

六月十五日

混成旅團方面に於ては左地區隊に引續き白砲第一聯隊長の擔任する

中地區隊の消息も亦不明となれり戦線既に統一なく諸隊は安里仲座附近各據點に據り孤立死闘しあるものゝ如し

第二十四師團の最右翼與座岳附近を占領しある歩兵第八十九聯隊は八重嶺岳方面より絶へず側背を脅威せられ戦力分散すると共に動搖しありしか遂に地形的に最も堅固と判断せる與座、八重嶺兩高地中間地區を北方より突破せらるゝに至れり

茲に於て軍は第六十二師團全力を混成旅團正面に投入し東方正面の敵に最後の出血を強要するに決せり

第六十二師團長は軍命令に響き歩兵第六十三旅團長中島中將をして部下旅團と共に混成旅團を併せ指揮し東方正面の戦闘を擔任せしめ歩兵第六十四旅團を眞榮平東用方地區に推進する如く處置せり師團司令部は依然山城に在り

六月十六日

混成旅團正面に於ては其の主力たる右地區隊（獨立混成第十五聯隊）

も遂に其の消息を絶つに至り旅團司令部は一〇八高地に於て直接敵  
戦車群の攻撃を受けつゝあり  
第六十二師團主力の東方機動は未熟なる地形に於て暗夜熾烈なる砲  
撃下遅々として進まず師團の企圖は先ず混成旅團の掩護下に與座岳  
南方の線に態勢を整へたる後半遭遇的に攻撃前進し舊陣地帯を奪還  
し止むを得ざれば現在の態勢の線に於て敵を邀撃せんとするに在り

六月十七日

混成旅團司令部及其の直轄部隊は一〇八高地及與座岳附近を頑守し  
あり

第六十二師團主力は依然移動中なり  
軍司令官は第六十二師團長に對し摩文仁高地に前進を命ぜり  
第二十四師團正面に於ては歩兵第八十九聯隊は與座を奪取せられて  
新垣附近に壓迫せられ更に強大なる敵の爲に歩兵第三十二、第二十  
二聯隊の中間地區を突破せられ全線方に崩壊状態となれり

此の日歩兵第二十二聯隊本部は機隊長以下殆ど全員七三高地に於て全  
滅す

六月十八日

第六十二師團の移動概ね完了す  
歩兵第六十三旅團は摩文仁一〇八高地中間地區に、歩兵第六十四旅  
團は眞榮平東方地區に在り  
此の夜混成旅團司令部は摩文仁に後退す  
第二十四師團正面に於ては歩兵第八十九聯隊方面逐次崩壊すると共  
に歩兵第三十二聯隊方面を突破せし敵戦車群は既に師團司令部所在  
眞榮平西北地區に侵入しつつあり  
斯くて軍は摩文仁を中心とする軍司令部、第六十二師團、重砲兵、  
混成旅團の各司令部を基幹とする集團と眞榮平を中心とする第二十  
四師團司令部を基幹とする集團とに漸次大きく分断離隔せんとする  
態勢となれり此の頃迄に衛生機關を始め有ゆる後方人員悉く戦闘部

隊に配属せられ敢闘中なり

六月十九日

軍司令官は軍の運命愈々盡きたるを知り大本營、方面軍及關係各軍に對し訣別の電報を發すると共に線下指揮下各部隊に對し左記要旨の最後の軍命令を下達せり

「全軍將兵の二ヶ月に亘る勇戦敢闘に依り遺憾なく軍の任務を遂行し待たるは同慶の至りなり然れども今や月折れ矢盡き軍の運命且夕に迫る既に部隊間の通信連絡杜絶せんとし軍司令官の指揮は至難となれり爾今各部隊は各局地に於ける生存者中の上級者之を指揮し最後迄敢闘して悠久の大義に生くべし」

此の日軍司令官、幕僚全員僅に残れる罐詰類や若干の酒を以て訣別の宴を張る折りから摩文仁東方約千五百米の稜線上に敵戦車十數輛出現し戦車砲弾は司令部洞窟附近に集中す

此の夜參謀の大部及司令部將兵約二十名は大本營連絡或は遊撃戦の

任務を受けて出撃す

歩兵第八十九聯隊長及工兵第二十四聯隊長新垣に於て戦死との報あり

六月二十日

摩文仁を中心とする周圍千五百米の圍内戦烈なる砲撃の間戦車砲機銃、小銃聲又威んにして愈々戦闘は最後の段階となれり  
第十方面軍司令官より第三十二軍司令官に對し左の如き感狀授與の電報あり

感狀

牛島部隊

同配属部隊

右は陸軍中将牛島滿の統率の下三月二十五日以降沖繩島に上陸せる敵に對し熾烈なる砲撃下孤立せる離島に決死勇戦すること三箇月此の間克く部隊の精強を發揮し隨處に敵を撃攘して之に甚大

なる損耗を強要し以て中外に皇軍の武威を宣揚せしのみならず  
敵海上勢力を牽制し我が航空作戦の戦果獲得に寄與せる所亦大なり  
是れ牛島中将統率下皇軍一体盡忠の誠を致し訓練の精華を遺憾なく  
發揮せるものにして其の善謀敢闘は眞く全軍の龜鑑たり  
仍て茲に感狀を授與す

昭和二十年六月十九日

第十方面軍司令官

六月二十一日

第二十四師團司令部とは徒歩傳令に依り最後の連絡を爲す  
摩文仁高地周邊に在る第六十二師團、混成旅團、重砲兵隊各司令部  
との間は依然徒歩連絡を續けたり  
各司令部毎に玉碎するに決す  
昨二十日敵手に入れる摩文仁部落を司令部衛兵一小隊を以て奪還す

此の日陸軍大臣參謀總長より軍司令官宛の訣別電報來る右電報に依り  
米軍司令官シモンパイナト將軍十七日眞壁附近に於て戦死せる  
を知る

六月二十二日

正午頃摩文仁部落の銃聲止む同地守備の衛兵全滅せるものゝ如し時  
餘にして司令部洞窟垂坑道上山頂衛兵敵に急襲せられて悉く短る敵  
の爆雷手榴彈洞窟内に落下し參謀長室附近に在りし將兵十數名死傷  
す

重砲兵隊司令部は既に昨夜總員斬込せるの報あり  
軍司令部は生存者を以て此夜八九高地山頂を奪還明二十三日黎明を  
期し全員摩文仁部落方向に突撃此の間軍司令官參謀長は山頂に於て  
自決するに決す  
司令部將兵は予定の如く十七日夜の月未だ上らざるに乗じ海岸に向  
する坑道口より山頂に向ひ相互に訣別しつゝ、斷崖を攀登突撃す

軍司令官參謀長は月將に南海に没せんとする頃坑道口外海面に屹立  
する斷崖上に於て古武士の型に則り目決し終りぬ  
時に昭和二十年六月二十三日四時三十分なり

